

第8章 河道特性

雲出川水系は典型的な扇状形の流域を持つ河川であり、三重県と奈良県の県境、布引山脈の三峰山（標高 1,235m）にその源を発し、八手俣川等の支川を合わせて伊勢平野に至り、更に長野川、波瀬川及び中村川等の支川を合流し、2.5km 付近で本川と雲出古川を分流し、デルタ地帯を形成して、伊勢湾に注ぐ一級河川である。



雲出川本川河口部

三峰山を源に周囲の山々に寄って狭まれた典型的な扇状地であり、河口部で雲出古川と本川を分流してデルタ地帯を形成している。

雲出川の河口から香良洲頭首工付近までは、河床勾配が $1/10000$ 以下と緩い勾配でデルタ地帯を形成している。

河口から長野川合流点付近までの大部分は砂質であり、大正橋付近から上流は河床勾配が $1/1000$ 以上となっている。

長野川合流点付近から徐々に瀬と淵の区別がつきやすくなり、瀬では礫が見られるようになる。其倉橋付近より上流は河床勾配が $1/500$ 以上となり、淵、早瀬、平瀬が連続する典型的な中流部の流れとなる。藤川合流点付近より上流では岩盤の露出も見られるようになる。

八手俣川合流点付近からは河床勾配が $1/100$ 程度となり、蛇行した河道に瀬淵の連続が頻繁に現れ、上流部の流れへと変化する。



雲出川上流（三峰山）

河口から 54.5km 上流は坂本川となり、水源地である三峰山（標高 1,235m）から急峻な溪谷を蛇行しながら流下する。



雲出川本川中流（28km 付近）

白山台地を蛇行する 30km 付近から下流へ 6.8km は家城ラインと呼ばれており、狼ヶ瀬、瀬戸ヶ淵等の名所の岩場を抜ける。雲出川で最も川幅が狭く、奇石が突出しており、水しぶきを上げて流れる。



雲出川本川中流
（20km 付近）

なだらかな丘陵地形の三ヶ野川合流点付近は、河畔林が点在しており、岩場や砂礫地を緩やかに蛇行しながら流れる。



雲出川本川中流
（16km 付近）

高野頭首工より上流付近の背後地は山付と田園地帯となっており、両岸には樹林群が繁茂している。また山付きの樹林は枝が河道内に迫り出しており、魚付林の役割を果たしている。



雲出川本川下流（7～10km 付近）

中村川と波瀬川が合流する 7～10km 付近は庄田、中川原、其村、赤川、小戸木、牧の 6 箇所の霞堤が設けられている。また、牧の高水敷には、旧堤防が残されており、河道内遊水池となっている。



雲出川本川河口（0km 付近）

本川と雲出古川と分流し、三角州を形成している河口部では、干潟が形成されており、シギ・チドリ類の生息地となっている。

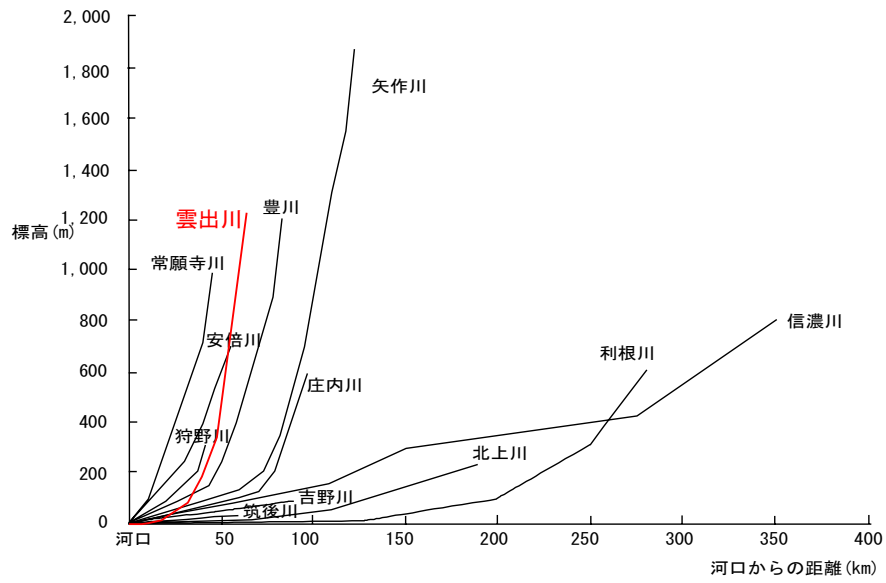


図 8-1 雲出川と他河川の縦断特性の比較

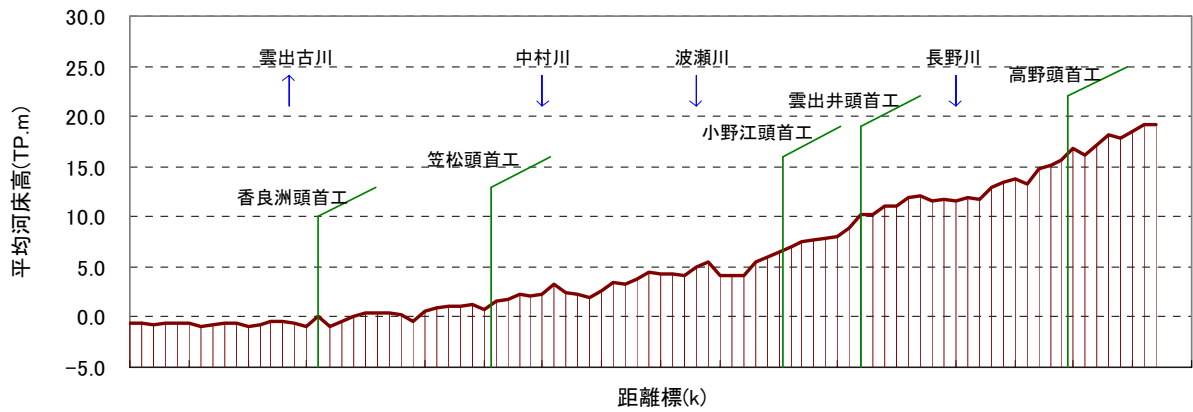


図 8-2 雲出川縦断図（大臣管理区間）